

## 「自然な出産」の医療人類学的考察

田辺けい子\*

A medical anthropological discussion of 'Natural Childbirth'

\*Keiko Tanabe-Nishino

\*Kitasato University School of Nursing

This study is a medical anthropological study of 'natural childbirth' in modern Japan.

Childbirth in modern Japan is marked by increasing medicalization of childbirth in the 1970s, after which a reversion to a method of childbirth known as 'natural childbirth' was sought. 'Natural childbirth' as typified by the Lamaze method was, amidst a context of feminist support, firmly established as a potential choice for childbirth. Alternatives to the Lamaze method such as the Active Birth emphasizing that women involved in childbirth give birth on their own terms (Balaskas 1984, 2002, Enomoto 1997) and Sophrologic delivery incorporating Zen and yoga (Raul 1986:1988) have been presented in recent years. Implying an ideal delivery, the term 'natural childbirth' is often described as "a good delivery" or "delivery on one's own terms" and is prevalent in today's society. While the term 'natural childbirth' is commonly used, however, natural childbirth is, according to the Japan Society of Obstetrics and Gynecology, not defined by the society itself.

As is thus apparent, the term 'natural childbirth' in modern Japan is not necessarily strictly defined; rather, it is used in various contexts by various researchers, medical practitioners, and women involved in childbirth and the people around them. The original term 'nature' in particular had an extremely broad meaning and is still rather vague, so while people tend to use it without delineating its specific meaning, 'natural childbirth' is used to represent a form of childbirth respecting the initiative of women.

Thus, this paper clarifies the concept of 'nature' upon which the term 'natural childbirth' is predicated, based on interviews with the women involved. In particular, it considers the concept of 'nature' in childbirth through the information provided by the test subjects consisting of not only women who have experienced a 'natural childbirth', but also including those who opted for a 'painless

---

\* 北里大学

childbirth'. Based on this, the paper discusses the contexts for the term 'nature' in childbirth as richly described by women who have given birth. It also presents a medical anthropological discussion of 'natural childbirth' as it describes an ideal delivery in various contexts in modern Japan. This discussion reveals that the term 'nature' has a broad meaning in the context of childbirth, and is also derived from the idea of having a 'safe and natural' childbirth guided by the security provided by obstetric medicine. Moreover, while these women are demanding a safe childbirth, they themselves have a range of requirements regarding what 'nature' means in this context. These include: 1. Women giving birth are able to feel and recognize the experience themselves, 2. Various daily conveniences are provided as much as possible, and 3. Their individuality is recognized during a childbirth in which their own preferences and right to decide are respected. This shows a slight gap between these requirements and the state of affairs of childbirth in present-day Japan, as depicted in various news reports and government policies surrounding obstetric medicine these days.

#### キーワード

自然な出産 Natural childbirth/Natural childbirth experience

女性 Woman

生殖 Reproduction

主体性 Subjectivity

無痛分娩 Painless childbirth/Painless labor

## I. 研究の背景と目的

現代日本の出産は、出産の医療化が進行した1970年以降、あたかもそれと逆行するかのようになり、いわゆる「自然出産」と呼ばれる出産方法への回帰が求められてきた。ラマーズ法に代表される「自然出産」は、フェミニストの支持を背景に出産方法の選択肢の一つとして定着してきた。近年ではラマーズ法に替わるものとして、出産の当事者が主体的に産むことを強調するアクティブ・バースという考え方<sup>1) 2)</sup>や、禅とヨガを取り入れたソフロロジー法と呼ばれる出産方法<sup>3)</sup>が紹介されている。さらに「自然出産」はしばしば「いいお産」や「主体的なお産」と言われるなど、理想的な出産像を含意した言葉として、現在、社会的に普及している。

他方、出産の場に目を転じてみると全出産数のなかのわずかな数ではあるが、助産

師が出産を介助する自宅出産や助産所出産が存在する。また、これもごく少数だが医療施設内に助産施設を設け、助産師が出産を取り扱う院内助産所や、産科医が開設する診療所のなかにも分娩台を廃した診療所が設立されることに見られるように、出産に携わる医師や助産師によって新しい出産のあり方が提案されている。加えて人々の出産に対する考え方においても、筆者がこれまで行ってきた調査で、医療者だけでなく出産の当事者もまた、出産は「自然」であるべきだと考えていることが確認されている<sup>4)</sup>。

だが、「自然出産」あるいは「自然な出産」という言葉がこのように一般的に用いられる一方で、社団法人日本産科婦人科学会自体は「自然出産」あるいは「自然分娩」の定義をしていない。つまり「自然出産」とは厳密に定義されている訳ではなく、様々な研究者や実践者、そして出産の当事者および周囲の人々によって様々な文脈で用いられている。

先行研究においては「自然出産」という言葉は大別して二つの文脈で用いられている。自然科学の研究領域では主に周産期医学を背景とした出産への医療介入をめぐる文脈（例えば鮫島・山内<sup>5)</sup>など）、そして社会科学の研究領域にみられる「自然出産」は女性の主体性が尊重された出産であるという文脈（例えば吉村、三砂などの一連の著作<sup>6) 7)</sup>である。だが、陣痛促進剤の使用や会陰切開および縫合術が高頻度に行われている現在の日本の出産の状況にあって、医療行為を伴わない出産はすでにきわめて少数と推察される。従って、医学的な文脈からの検討だけでは「自然出産」を取り巻く状況を描き出すことは困難である。ただし、ここに吉村や三砂など女性問題を扱う研究者らが主張する女性の主体性という視点を加えると、「自然出産」への女性たちの関心の強さは、近代医療に対して異議を唱え、女性たちが身体を自分のものとして取り戻せる出産方法だとみなしている結果ないし行為として捉え直すことができる。

ところで1970年代以降の日本は、年間出産数が急速に減少し、2006年の合計特殊出生率では1.32と、人口置換水準2.07よりはるかに低い数値を記録するなど、いわゆる少子社会といわれて久しい。少子化の原因としては女性の就労率、労働意欲の上昇などライフスタイルの変化により人生における結婚や育児の優先順位が低下している点や、婚外子を忌避する日本の文化的背景、子どもが嫡出子である方が社会保障を得やすい社会制度的な側面、そして近年ではとくに経済的困難を背景とした晩婚や晩産化の進展、生涯未婚率の上昇などが諸領域での研究成果の蓄積から指摘されている。産みたくても産めないという社会的状況があるとはいえ、産まないことを女性が選択し

ていることは間違いない。だがひとたび女性が産むことを選択すると、産まない選択の背景が多様であるのとは反対に、産み方の選択は「自然な出産」という狭義の枠組みに囲い込まれていく。

以上に見たように、出産における「自然」は女性の主体性を尊重する出産形態を表象する語として用いられる一方で、その具体的な内容は極めて曖昧なまま人々に用いられている。そこで本稿では「自然な出産」という言葉が前提としている「自然」という言葉が意味する内容を、当事者である女性たちへの聞き取り資料から整理し、その上で、出産した人々によって饒舌とも言えるほど繰り返し語られる理想の出産像としての「自然な出産」の医療人類学的考察を試みる。「自然な出産」への回帰が叫ばれた1970年代から約四十年間を経た今日、妊娠や出産を迎える女性たちの今後の動向をとらえる一つの指標として提示するところに、本稿の意義があると考えられる。

## II. 調査方法

### 1. 分析対象資料

分析対象は、筆者が2003年から2005年にかけて断続的に行った出産の当事者への聞き取り調査で得られた資料とした。

#### ・調査対象者の選定：

主たる診療科を産婦人科としているAレディースクリニック（関東地区）へ文書を用いて研究協力を依頼し、同意を得られた人々への聞き取り調査を行うとともに、調査対象者からの紹介など人的ネットワークを活用した。また、重症妊娠高血圧症候群や死産、胎児および新生児異常、産褥合併症の既往のある人々を調査対象者から除外した。

#### ・調査対象者の属性と内訳：

調査対象者は出産経験者14名である。出産形態別には「自然な出産」<sup>注1</sup>の経験者9名、無痛分娩の経験者5名となる。また、出産場所別では「自然な出産」の経験者9名のうち5名は施設内出産、4名は自宅出産であり、無痛分娩の経験者はすべて施設内出産である。なお、「自然な出産」と同様にして異常出産の定義や解釈にも明らかな線引きがなされていない現状を踏まえ、調査対象者が出産時に受けた主な医療処置を付記した（表1）。

---

#### 注1

本稿では本人の申告あるいは母子手帳への記載に基づき「自然な出産」や「自然な分娩」の用語を用いた。なお、本文中で言及している通り「自然な分娩」や「自然な出産」は実態が明らかでない用語といえる。従って、本稿では「自然な分娩」や「自然な出産」というように「括弧付き」の表記を行った。

表1：調査対象となった人々一覧

インフォ ーメント	出産 回数	分類	出産した 場所	分娩時における 主な医療処置の有無と内容	人数	小計	合計
A氏	1	「自然出産」*	医療施設	陣痛促進剤の使用 会陰切開+縫合術 吸引分娩	5	9	14
B氏	1	「自然出産」	医療施設	会陰切開+縫合術			
C氏	1	「自然出産」	医療施設	会陰裂傷縫合術			
D氏	1	「自然出産」	医療施設	会陰切開+縫合術			
E氏	3	「自然出産」	医療施設	会陰切開+縫合術			
		「自然出産」	医療施設	会陰切開+縫合術			
		「自然出産」	医療施設	会陰裂傷縫合術 弛緩出血に伴う血管確保+ 子宮収縮剤の投与			
F氏	1	「自然出産」	自宅	なし	4	5	
G氏	2	「自然出産」	医療施設	なし			
		「自然出産」	自宅	なし			
H氏	1	「自然出産」	自宅	なし			
I氏	3	「自然出産」	医療施設	クリステル胎児圧出法			
		「自然出産」	自宅	なし			
		「自然出産」	自宅	なし			
J氏	2	「自然出産」	医療施設	会陰切開+縫合術			
		無痛分娩	医療施設	硬膜外麻酔+血管確保 陣痛促進剤の使用 導尿 会陰切開+縫合術			
K氏	1	無痛分娩	医療施設	硬膜外麻酔+血管確保 会陰切開+縫合術	5	5	
L氏	1	無痛分娩	医療施設	硬膜外麻酔+血管確保 導尿 会陰切開および縫合手術			
M氏	2	無痛分娩	医療施設	いずれも 硬膜外麻酔+血管確保 陣痛促進剤の使用 会陰切開+縫合術 ※第1子出産時のみ上記に加え クリステル胎児圧出法			
		無痛分娩	医療施設				
N氏	1	無痛分娩	医療施設	硬膜外麻酔+血管確保 導尿 会陰切開+縫合術			

\*本人の申告あるいは母子手帳への記載に基づき「自然出産」の用語を用いている。

調査対象者を出産回数でみると1回産婦が9名、2回産婦が3名、3回産婦は2名であったが、いずれも最終の出産経験から3年以内（平均9.2ヶ月）の者で、年齢は30～36才（平均32才）であった。

- ・調査方法：半構造化面接法（1対1の直接面接）、Single Interview
- ・調査時間：35分～120分間（平均約60分間）

## 2. 分析方法

聞き取りデータは、調査協力者の了解を得てすべて録音し、逐語文字化した後に、語りの文脈に注目した上でデータベース化した。分析は出産経験者の語りの内容を中心とし、その上で語りの背景についてのデータ収集が不可欠とされる民族誌的分析方法を採用した。その理由は、民族誌的分析はある集団における考え方や価値観、世界観などを描き出すことを最も得意とする分析方法であるからである。従って、「いいお産」と言われる「自然な出産」が前提にしている「自然」の意味する内容を出産経験者の語りから明らかにしようとする本研究の試みにとって、最も適当な分析手法と考えた。

分析においては、「自然出産」の明確な定義がない現状を踏まえ、本稿では人々が語ったすべての内容のなかでもとくに「自然なお産」の文脈に現れた語りに着目して分析を行った。

なお、本文中で引用した語りデータは、語りの文脈を最大限に考慮した上で筆者が整文した。〔…〕部は筆者による中略箇所を示す。

## 3. 倫理的配慮

調査対象者に対しては調査に先立ち、研究目的及び方法、調査は開始後いつでも拒否できること、及びそれによって調査対象者は何ら不利益を受けないこと、得られたデータは本研究以外に使用しないこと、データの処理にあたっては対象者を特定できないようにすることを伝え、全員から調査協力の同意を得た。なお、本研究はお茶の水女子大学大学院において計4回開催された修士論文構想発表会で、専攻コースに所属する全ての教員による倫理的配慮に関する審査を経た上で行われた。

### Ⅲ. 人々の語りに見出された出産における「自然」

#### 1. 「自然出産」を経験した人々の語りからみる「自然な出産」

質問内容は多岐に渡ったが、その中心は自らの出産経験についての聞き取りである。ここでは特に、人々が自らの出産についてどのような言葉を用いて「自然」であった、あるいは「自然」ではなかったと語るのか、という点に着目する。

##### (1) 「自然な出産」という語りの意味

人々の語りは明らかな線引きはないものの、出産を「自然な出産」と「自然ではない出産」とに大別した上で、「自然な出産」を陣痛の痛みを経験する出産や経膈分娩、そして「自然ではない出産」を陣痛の痛みを経験しない出産や胎児が産道を通りしな帝王切開術による出産、というように出産における「自然」が意味する内容を示していた。その際、無痛分娩は帝王切開術とは異なり胎児が産道を通りする経膈分娩であることから「自然な出産」に該当すると解釈できるが、人々は無痛分娩を「自然な出産」には分類せず、「自然ではない出産」に分類する特徴があった。

無痛分娩は「自然」ではないですね。無痛分娩を「出産」と言ってしまうのは少し違うような気がします。女性は「自然」にいくように出来ていると思います。「自然出産」出来るのに敢えて無痛分娩をするのは良くないと思います。

〔D氏の語り（他にA, C, F, G, I氏も同様の語りをしている）〕

私の出産は吸引分娩だったけど、自然だったよなと思います。だって、もしも吸引していなかったら私は産めなかったと思うし、ちゃんと産むためにマタニティビクスとかスイミングとか、食べ物に気をつけたり色々やってきたのだから、自然かなと。

〔A氏の語り〕

自然出産は、この世のものとは思えないような痛みがあった。しかしその痛みがあってこそ「出産」だと思う。

〔D氏の語り（他にH, I氏も同様の語りをしている）〕

一度は痛い思いをした方が良いかもしれませんね。私も一人目を自然出産で産んでみて「ああ出産ってこういうものなのか」ということが分かりましたから。

[J氏の語り]

本来、出産とは子どもを産むこと、あるいは子どもが生まれることを言う。しかし「無痛分娩や帝王切開術は<自然>ではない」さらには「無痛分娩や帝王切開術は<出産>とは言えない」などの語りが示すように、人々は「自然」であることに「出産」の要件を見出している。また、たとえ吸引分娩という医療行為の介入があった出産でも、出産に際して産むための身体づくりをしていることをして「自然」という言葉で語っている。このように「自然」という言葉は、次項でみる「女性の身体は<自然>の摂理に支配されている」という多くの語りが示すように、女性の身体性との関係で用いられていた。

## (2)女性の身体と結び付けられる「自然」についての語り

語り手たちが出産の要件として考えている「自然な出産」の具体的な意味内容は、女性の身体性さらには母性を示す複数の語りに着目することで鮮明に浮かび上がってくる。

やっぱり女性として生まれてきたのだから出産を経験してみたいし、出産は潮の満ち引きに関係しているとか言いますよね。そういう風に女性の身体は自然にいくように出来ているのだから、その痛みも経験してみたいと思いました。〔…〕無痛分娩は良くないと思います。女性の身体は産めるように出来ているじゃないですか。だったら普通に陣痛を経験する「自然出産」の方が良いと思いますけど？私はずっと「自分は産める」と思っていましたし、妊娠してからはマタニティスイミングやマタニティピクスをして産む準備をしましたから。絶対に産めるんですよ、女性は。

[A氏の語り（他にD、I氏も同様の語りをしている）]

子どもが狭い産道を一生懸命通ってくるのが分かるから、自分もあの痛みに耐えて一生懸命にいきました。子どもと一緒に頑張ったんです。人間ってこうして母親になるんでしょうね。母親だったら痛みなんか乗り越えて頑張れるんですよ。



[D氏の語り（他にF, G, I氏も同様の語りをしている）]

帝王切開や無痛分娩など、痛みを感じないで産んだら、子どもをもらってきたような感覚になっちゃうかもしれない。

[F氏の語り（他にB, C, D, F, G, I氏も同様の語りをしている）]

このように出産における「自然」は、出産に伴う痛みによって胎児の下降感や娩出を確認し実感すること、産婦自身が怒責（いきみ）をかけて胎児を娩出することとして語られている。また、「女性の身体は自然にいくようにできている」という複数の語りは、語り手である女性たち自身が女性、あるいは女性の身体に「自然」を見出すような考え方をみて取れる。これらの言葉や考え方を筆者は以下のように理解する。

女性の身体には女性に固有の器官として子宮や膣などの内性器、および会陰部などの外性器がある。なかでも子宮や膣は自分自身の身体でありながらも普段は意識されることはほとんどない。月経時の月経痛や経血がおこる感覚をもつことでその存在を感じることはあっても、普段は触れたり目にしたりすることの出来ない器官である。それが出産においては「この世のものとは思えないような」と形容される痛みによって、子宮や産道となる膣や外陰部の存在が非常に鮮明に意識されることになる。むしろ、子宮筋腫や内膜症、月経痛などによる子宮周辺の痛みおよび諸症状、性行為や自慰行為などによる膣の感覚などによって、女性は自らの子宮や膣を意識する体験をしている。しかし、出産の痛みというクリティカルで強烈な体験によって、人々は女性性器の存在をより鮮明に意識すると理解できる。

さらに、「女性は〈自然〉の摂理に支配されている」という内容の語りから、人々には出産に伴う痛みの感覚を通して男性には無い女性固有の身体部位を意識し実感し、自分が女性の身体を有していること、すなわち自分が女性であることを確認することを「自然」という語で説明していると理解できる。また、「自然」が「母親であれば当然経験すること」と語られているように、人々は「自然」の体験を母親になる為の通過儀礼が成立する要件とみなしている。

### (3) 出産における「自然」と日常性についての語り

これまで見てきた「自然」の内容をより具体的に検討するため、すべての調査対象者が「〈究極の〉自然出産」と説明していた自宅出産を、実際に経験した人々の語り

を取り上げ、出産における「自然」を日常性との関係で考察したい。

お産のときでもお腹が空いた時には、夫や上の子ども、お義母さんと一緒にみんなでお寿司を食べたり、咽喉が渴いたときには夫に買ってきてもらったりポピタンDを飲んだ。[……]隣の部屋にはお義母さんとお義父さんがいた。ふすま一枚向こうは「いつもの風景」でした。

[H氏の語り（他にG、I氏も同様の語りをしている）]

お産の途中で陣痛が一時的に弱くなってしまった。その時に夫と二人だけで外へ散歩に行ったりお風呂に入ったり家事をして過ごした。

[F氏の語り（他にG、H、I氏も同様の語りをしている）]

自分の楽な姿勢、好きな場所で産めた。助産師さんや出産経験のある友人からの助言を参考に、妊娠中から色々考えて決めた。一旦、お産が始まってからも楽な姿勢を色々試したり、いざとなったらどこでどのように産んでもいいと思っていたから、気が楽だった。

[G氏の語り（他にI氏も同様の語りをしている）]

自宅では出産に立ち会った人たちみんなが援助してくれた。例えば、私が「腰が痛い」と言えばみんながこぞって腰をマッサージしてくれたり、「咽喉が乾いた」と言えばお水を飲ませてくれたり、色んなところから「手」が出てきて「至れり尽くせり」だった。こういうことは病院ではしてもらえませんか。

[I氏の語り（他にG氏も同様の語りをしている）]

このように「自宅出産は<自然>だから良い」と語る人々は「みんなでお寿司を食べた」、「夫が買ってきたりポピタンDを飲んだ」、「陣痛が弱くなった時に夫と二人で散歩に出た」、「自分の好きな姿勢で産めた」と、自らの自宅出産における経験を施設内出産では経験できない好ましいものとして説明する。これは出産という状況を除く、日常の、普段の生活動作を自分の思いのままに行えることを、人々は「自然」という言葉を用いて語っていると読み取れる。さらに人々は医療施設での「自然出産」の経験と対比させた上で自宅出産の良さ(advantage)を、脱医療化の文脈だけではなく

出産という営為が産婦の意思を中心に展開することに見ている。分娩体位や分娩場所など、自らの出産に関する諸条件が自らの選択と決定に委ねられていることに「自然」を見出し、自宅出産を「<究極の>自然出産」として評価している。

これを先に見た出産への医療介入をめぐる文脈<sup>5)</sup>に照らした場合、無痛分娩が「自然ではない」と語られる要因をそもそも無痛分娩に不可欠な麻酔処置それ自体が医療行為であり、従って「自然」ではないとする解釈もまた可能である<sup>注2)</sup>。麻酔処置を受けることで産婦の身体は医療の管理下におかれる。こうした医療の枠組みの中に自分の出産や身体が組み込まれることへの拒否感や抵抗感から、人々は無痛分娩を「自然」ではないと説明すると推察できる。

しかし、単に医療化された出産に対する抵抗感だけでは説明できない点もある。それは歩行や食事摂取の一時的な制限、時には排尿の介助やカテーテルを用いた導尿処置など、産婦が麻酔処置に伴って受ける諸制約からみることが出来る。つまり、食事や歩行、排泄行為といった人々にとっての日常生活における動作一つひとつを「自然」としてとらえ、それが出来ないことに対して人々は「自然ではない」と語っていると読み取れる。

#### (4)多様な意味で語られる「自然な出産」

以上に見たように、人々の語りに現れた出産における「自然」は、以下のものを含んでいる。1. 出産する女性自身が産むための身体である女性身体を実感し確認すること、2. 出産における自己の主体性が担保され、自らの選択および自己決定権が尊重される出産の様態、3. 様々な日常性が可能な限り担保される状況、という3点である。

本来、「自然」という言葉は、その概念自体が非常に広範な意味を含むものである。さらに曖昧であるが故に「自然」の度合いには階調がある。しかし出産した人々が自分の出産経験を語り、「自然」の意味する内容に言及する際には、常に女性の身体や母性、および出産における自己の選好のあり様などと関連させて語る傾向が確認された。本項ではこのように豊かな意味を付与する人々の考え方の背景を以下の二点から考察する。

#### 注2

もっとも、広義の無痛分娩には、精神予防性無痛分娩のように麻酔法を用いないラマーズ法などの呼吸法やソフロロジー法など、トレーニングによって痛みを和らげる方法が含まれることも少なくない。だが、人々はこれらに対して「自然ではない」とは語らない。

第一に、「自然」という語は、様々な場面や文脈で、多様な意味を使い手が付与して使われるため、どのようにもとらえられる曖昧さと多義性をもつ。こうした広範な意味を孕む語が「自然出産」というように「出産」に冠せられたが故に、出産という身体に起きる生理的現象にあたかも「自然な出産」と「自然ではない出産」が存在するかのような、いわば二項対立的な認識を生じさせている点である。「自然な出産」と「自然ではない出産」という考え方が派生することで、人々は「自然」に対して新たな意味を付与し、その上で自らの出産が「自然」であることに価値を見出す。とりわけ女性性の刻印された身体を女性たち自らが「自然」の語を用いて語る時、出産における「自然」は単なる「自然出産」という出産の一形態を超えて、生殖を担う女性の身体についての考え方を示すなど、より広い意味を含む自然出産言説を生成しこれが社会的に流布し定着する。なぜならば、女性は帝王切開術や無痛分娩など複数の出産形態のなかでもとりわけ「自然」を経験しうる出産形態のなかに、自らの女性性を確認したり母親になるための装置を見出し、これを実践しているからである。このように出産における「自然」は、出産する当事者によって言説化され実践されるといふ循環を繰り返している。

第二に、出産は個人的な営為であると同時に、社会的な営みでもある。それが故に、人々の出産における「自然」に対する認識は、社会的な条件や状況の影響を受けて変容し得るという点である。つまり、社会科学領域における従来の出産研究では「自然出産」という出産形態のうちに女性の主体性を見出してきた。では人々が「自然ではない」と説明する無痛分娩は、女性の主体性や自己決定の見地から考えた場合、どのような位置づけになるのだろうか。出産の医療化が進展をみせている現代の社会的状況を踏まえると、「自然な出産」そのもののあり様に変容しつつある可能性が残されている。この点について次項で医療行為によって出産に伴う痛みを除去あるいは軽減する無痛分娩を経験した人々の語りを引用し、「自然な出産」の検討を試みる。

## 2. 無痛分娩を選好した人々の語りからみる「自然な出産」

前項までの議論を踏まえて本節では、人々が「自然」ではないと説明する無痛分娩を選好した人々の語りを取り上げ、その文脈から出産における「自然」に対する考察を加える。この作業を通じて、自然出産言説の多様なあり様を示したい。

無痛分娩を否定的に言う人たちもいますけど、痛みがまったく無いわけでもない

し、赤ちゃんが出てくるところも見られるし、しっかりいきんで自分で産んでいる感覚はあるんですよ。〔…〕だから、言ってしまうえば、私は無痛分娩で産んだけど自然分娩ってことになるってこと？（笑）

〔J氏の語り（他にK, M, N氏も同様の語りをしている）〕

引用した語りは無痛分娩を選好した女性の語りである。この語りは、人々が、痛み  
の感覚を通して女性固有の身体部位を意識し自分が女性であることを確認することを  
「自然」と考え、その点から無痛分娩を「自然」ではないと説明することに対してアン  
チテーゼを投げかけている。つまり、無痛分娩もまた「自然」を担保した出産である  
ことを表明しており、その上で現在用いられている「自然」という言葉の曖昧さ  
に対して疑問符を付している。このように、出産における「自然」がもはや従来言われ  
てきた「自然な出産」だけに見出せるものではなく、これまで「自然ではない」とさ  
れてきた出産形態のうちにも「自然」を見出す可能性が示されている。

無痛分娩をした人自体が少ないですからね。経験者の情報が少ないから、これ  
を選択するのは難しいけど、でも、産むのは私じゃないですか？で、痛いのも私。  
だったらどう産もうが私が決めていいじゃないですか？責任も私が取らんだし。

〔L氏の語り（他にJ, M氏も同様の語りをしている）〕

麻酔をした為に、自力でトイレに行けなかった。でも、それはそれで仕方ない  
という感じでした。色々調べて、自分で納得して決めたことだから、気にならないし、  
「自然」にはこだわらなかった。

〔J氏の語り（他にL, M, N氏も同様の語りをしている）〕

これらの語りには、自らの出産に対する諸選択や決定の結果、無痛分娩を選好し、  
人々が様々な意味を見出している「自然な出産」に対して何ら拘泥のない考え方が見  
て取れる。とりわけ「自然な出産」を選好した人々が、比較的、脱医療化の文脈で「自  
然」を説明するのに対して、ここでは医療行為を積極的に引き受けることに自己の意  
思のあり様を見出している。さらには出産という営為をめぐる自己の責任に関しても  
言及するなど、「主体的な出産」を照射した語りを展開している。

無痛分娩は、パニックにならない分、自分自身や周りの人たちのこと、お産の進行状況なんかに対して、常に冷静に、客観的な感じていることが出来ました。いきむ時にも、どうしたら良いのかをしっかりと考えられたりするので、自分を保ったまま、ちゃんと産めた気がします。

〔K氏の語り（他にJ, L, M, N氏も同様の語りをしている。）〕

出産という非日常の過程にあって、自らの選択や決定、そしてそれらに伴う状況に対処する為、自己を冷静な状態に保つことに価値を置く考え方が見て取れる。その際、無痛分娩に伴う麻酔処置は、先の語り手たちのように脱医療化の文脈で言うような排除すべきものとしてではなく、むしろ積極的に活用すべきものとして語られている。

無痛分娩は医療が介入するから「自然」ではないのかもしれない。でも、自分で必要だと判断した医療行為をただけなんだから、私の出産はよく聞く「主体的なお産」だったんじゃないですか。

〔M氏の語り（他にJ氏も同様の語りをしている）〕

このように出産における「自然」は、それを出産の要件としたり、出産当事者の自己選択や自己決定権に関連づけた上で「自然出産」という一つの出産形態に求める考えただけでは納まりきれない広がりを見せていることが、これらの語りには如実に現れている。

### 3. 「自然な出産」と産科医療

出産における「自然」を人々の語りからその意味する内容を整理した結果、人々は「自然」を多様な言葉で説明し、さらには「自然」が一つの出産形態には括れない広がりを見せ始めていることが確認できた。だがその一方で「自然な出産」という言葉が出産の現場で混沌状況のうちに使われており、出産する女性たち自身が混乱している状況もまた確認されている。本項ではその混沌状況について報告し、産科医療をめぐる言説を検討しながら「自然な出産」について若干の考察を加える。

さっきまで私「吸引分娩だったけど自然だよなあ」とか「点滴もしたけど自然って言うていいよなあ」とかいろいろ話したけど、.. でも、私のお産は自然だった

んですか？

〔A氏の語り〕

会陰切開まで自然じゃないって言ってしまったら、自然な出産なんて無いですよ。山奥で動物みたいに一人で産まなくちゃならない？でもやっぱり会陰切開は自然ではないような気がするし…難しいですよ。〔…〕でも「安全な自然」という「括弧付きの自然」が、私にとっての自然な出産だし、それを求めて産婦人科に行きました。

〔D氏の語り（他にA, J, L, M, N氏も同様の語りをしている）

上段のA氏の語りは、出産に携わる医療者であれば一度は耳にするであろう出産した女性からの「質問」である。筆者も助産師として10数年間、産科医療に携わってきたが、上記の内容を持つ多くの「質問」を受けてきた。生まれて間もないわが子を胸に抱き、夫や家族、ときには医師や助産師など、医療者を含めた周囲の人々と出産の喜びを分かち合い実感しているそのときに、出産を為し終えた達成感や満足感をたたえた表情をしながらも、「私のお産は自然だったのでしょうか？」と口にする女性は少なくない。この「質問」の意味を尋ねると、自分では「自然な出産」をしたと思っていても、その考えに自信が無いため産科医療の専門家である助産師や医師に確認したいのだという。また、下段のD氏の語りは自らの出産の「自然」の度合いを、行われた医療の度合いから推し測ろうとして混乱している様子が見て取れる。A氏はこの語りに先立ち「吸引分娩でなければ出産できなかった（P.95）」と語り、D氏は「山奥で動物みたいに一人で出産する」のではなく、「安全な自然」という括弧付きの「自然」の下で出産したいと語っている。ここに見るように、「自然な出産」は近代医療を排除した出産ではなく、A氏とD氏の語りが示しているように産科医療に担保された安全な出産である。

ところで、近年の産科医療をめぐる様々な領域で活発な議論が展開している。とりわけ各種報道が「産科医療の崩壊」に関する特集を組むなど、広くこの問題を扱い、産科勤務医の減少に伴い出産の場が急速に失われている状況から「お産難民」という言葉を生むなど、産科医療は危機的状況にあるとする言説を流布させた。また、産科医不足の状況を受けて厚生労働省は、2005年、産科の集約化の必要性について各都道

府県に対しこれを検討するよう通知している<sup>注3</sup>。

ここにみる出産をめぐる国の施策や一般に流布する産科医療をめぐる言説には、本稿で見てきた「自然な出産」に対する考え方、すなわち、女性の身体を実感したり、出産という極めて個人的な営為をめぐる諸選択に対して自分が主体的に選好できる領域を残しておいて欲しい、分娩というクリティカルな一場面を切り取って考えるのではなく妊娠から産褥までの一連の過程で「自然な出産」を経験したい、そしてそうした経験を「括弧付きの自然」の下で安全に経験したい、という考え方とは似て非なる考え方が見て取れる。

「自然な出産」が「いいお産」であるとする言説がある<sup>8)</sup> 一方で、このように「産科医療の崩壊」という言葉が広く流布し、あたかも女性は産科医療の恩恵なしには出産できないとでも云うかのような認識が広く定着している現状がある。このことが示すのは「産科医療の崩壊」という言葉をこぞって用いる各種報道や行政が考える「いいお産」とはすなわち、出産には常に産科医療を伴う、あるいは、産科医療が不可欠である出産像を指しているということである。だが筆者は、産科医数の確保などに示されるような単に安全性だけを重要視する出産像は、女性たちが期待している理想の出産像とは、かけ離れた像であると考ええる。

#### IV. 結語

本稿では出産を経験した女性たちがその経験を語る中で繰り返し用いる「自然」という言葉に多義性が含まれていることを確認した上で、その内容を検討し「自然な出産」をめぐる諸相を論じた。そして「自然な出産」を、近代医療と対抗するような出産方法というよりはむしろ「安全かつ自然な状態」で出産したいという女性たちの考え方と、出産における「自然」は次のような内容を含んでいることを示した。すなわち 1. 出産する女性自身が自らの産むための身体である女性身体を実感し確認すること、 2. 出産における自己の主体性が担保され、自らの選択および自己決定権が尊重される出産の様態、 3. 様々な日常性が可能な限り担保される状況である。そしてこれらが重層的に在ることを示した上で、今日の産科医療をめぐる各種報道や国の施策にみる現代日本の出産のあり様の一端を考察した。

---

注 3

「小児科・産科における医療資源の集約化・重点化の推進について」(平成 17 年 12 月 22 日付け医政発第 1222007 号厚生労働省医政局長等連名通知)



なお、主体および自己決定の概念は、医療や健康に関わる社会科学の研究領域において、現在、最も注目されている概念の一つである。従って今後の課題は、これらの研究成果の蓄積に照らし、本稿で見てきた「自然」の概念分析を行うことである。

本稿は、2005年度お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士論文に大幅な加筆と修正を行ったものである。また、本研究の一部を第21回日本保健医療行動科学会学術大会で報告した。

### 引用文献

- 1) ジャネット・バラスカス：ニュー・アクティブ・バース（改訂版）、1-318、現代書館、東京、2002
- 2) 柄本三代子：身体と医療化の問題—出産をめぐる身体の外と再構成、年報社会学論集、1997
- 3) エリザベット・ラウル：ソフロロジー式分娩教育—妊婦のための積極的リラクセス法（松永昭／松永史子共訳）、メディカ出版、大阪、1988
- 4) 田辺（西野）けい子：〈出産の痛み〉に付与される文化的意味づけ—「自然出産」を選好した人々の民族誌—<sup>エスノグラフィ</sup>、日本保健医療行動科学会年報21：94-109、2006
- 5) 鮫島浩・山内憲之：看護のための最新医学講座 産科疾患（日野原重明監修）、1-432、中山書店、東京、2001
- 6) 吉村典子：子どもを産む、岩波書店、東京、1992
- 7) 三砂ちづる：〈お産〉からとりもどす女性のからだ、環、12：140-145、藤原書店、2003
- 8) 松島京：出産の医療化と「いいお産」—個別化される出産体験と身体の社会的統制—、立命館人間科学研究、11：147-159、2006
- 9) ダナエ・ブルック：自然出産—女の自立とゆたかなお産（横尾京子・秋山洋子・山田美津子訳）、1-407、批評社、東京、1980
- 10) [特集] 自然分娩を考える、周産期医学、28：1541-1645、東京医学社、1998